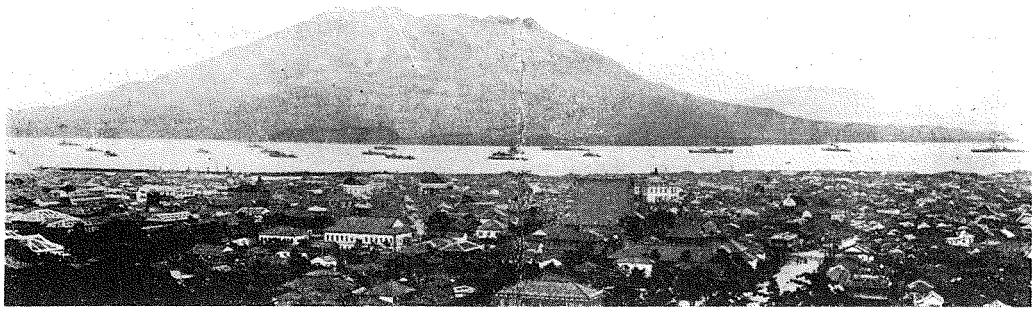


鹿兒島市より櫻島を望む

薩南紀行

國都線霧島神宮驛の開通に際し……(2)

一記者

熊本より南下

門司から熊本まで急行で約五時間、此間至るところ工業地帶で、内容は分らないが兎に角に北九州の豪盛な産業ぶりを車窓から眺める。然し車中の苦熱はまた格別にひどい。

汽車が熊本に着くと單身一等車に乘り込んだモーニングコートの一紳士がある。それは熊本建設事務所長釘宮盤氏である。旅中に舊知に會ふ位樂しい事はない。汽車が熊本驛を發してから早速面會する。傍にはすでに二人の客があつた。何れも明日の霧島神宮驛開通式に列する人である。

車中談は主として工事談であるが、時に政治、文藝、産業方面にも飛び、また車窓に送迎する山や海に就て諧謔まぢりの説明や、批評を開きつゝ我等は車中の苦熱も忘れてゐた。汽車は不知火を以て有名な八代灣の海岸景勝の地を南へ南へと進む。

薩摩入り

肥後と薩摩の國境はさすがに要害の地をなして山また山である。而して言語、風俗まで一變化をなしてゐる事もうなづかれる。

鶴の群が飛來するを以つて有名な阿久根も海岸景勝の地であるが、晩秋の候でないと鶴は見られない。川内をセンダイと呼ぶ驛を過ぎ、伊集院驛に來て鹿兒島らしい氣分になる。夕方六時愈々鹿兒島驛に下車した。門司から急行約九時間を要した。

鹿兒島風景

鹿兒島驛より悠々人力車に乘つて市の中央なる明治館と云ふ旅館に泊る。市内の風景はまことに粗朴なものである。縣廳の建物などは東京永田町の新議事堂を小形にした樣な物で、中々贅澤な出來らしいが、左右の民家は粗末なものが多い。

旅館に着くと直ぐ入浴して車中の煙と汗を流したが、鹿兒島はとても暑くてたまらない。寢られぬまゝに市中散歩に出た。電車通りは中々廣く、鋪裝もしてある。安物大賣出しの賑かな通りも少しはある。横町には怪しげなカツフエーが澤山あるには驚いた。西郷隆盛氏の城山も直ぐ其所から近いのに此有樣だ。維新の元勳も今日の鹿兒島を見ては失望する處が多いだらう。

鹿兒島の鄉土氣分

我々が旅をすると先づ何よりも、其鄉土氣分を探り度いのだ。然しそれは全然望めない樣だ。都會と云ふ都會では今や殆んど特有の鄉土氣分を失ふてゐる樣だ。第一旅館の女中が總て東京弁である。何故

鹿兒島辨でやつてくれないだらう。女中に聞いたら鹿兒島辨も遣ひますが、御客樣に解らないからですと答へた。何うせ四五百里も遠方の土地だから少し位分らないのは我慢する。それから女中同志に喋らせて見たが、成程分らない。通譯がないと分らない位だ。これでは通用しない，鄉土氣分の保存も無圖ケしい物だと思つた。

櫻島大根の風味

鹿兒島で鄉土氣分の名物を土產のしるしに求めようとしたが、薩摩燒はもう平凡だし、織物などは猶つまらない。何か奇拔なものを見付けようとしても中々見付らない。賑かな處は新宿の場末の樣だし、淋しい處では古道具屋もない。小供から櫻島大根の種を頼まれてゐたので、それを探したが東京ではとても成長しないだらうと言ふので、大根の實物を買ふ事にした。處がそれは果して大きいので、汽車の棚などにのせるべきしろ物ではないと云ふ事を、櫻島大根の繪葉書に書いて東京へ出し、遂に輪切りにした味噌漬を買ふ事に決定した。

霧島神宮驛前の鐵道省受付

樽詰を小包で直ぐ發送さした。(東京へ戻つて見ると中々評判が良い。成るほど東京などの味噌漬大根の到底及ぶ味ではなかつた。)

全市鷄鳴に包まれる

暑い暑い鹿兒島の一夜をやつと三時間も眠れたかと思ふと、もう東の空が明くなつて來た。何んだか騷々しい聲がする、四方からドツト一時に鷄の聲が聞へて來た。それが次第に聲が增して數千となり、數萬となつた。

自分の泊つてゐる旅館は市の中央である。近所に養鷄所のある筈はない。不思議な事だと耳をすましてゐると、明治館を中心として遠近に響く鷄鳴の聲に殆んど鹿兒島市全體が一の養鷄場ではないかと思はるゝ位になつた。曉を告ぐる鷄の聲としては實に壯大な情況である。都市の中央で此丈け賑かな鷄鳴を聞く處は恐らく日本の他の都市のみならず世界に於ても稀な事である。

鹿兒島から霧島神宮驛

七月十日の朝、明治館から圓タクを驅つて鹿兒島驛に着く、霧島神宮驛行の特別列車二等室はすでに滿員である。それは全部開通式に臨む來賓である。之等の來賓が喧々囂々と談ずる言葉は決して通譯を要する程分らないものではない。服裝も言葉も東京近在の人に少しも變りはない。鹿兒島の鄉土氣分は此所にも見られない。

汽車は鹿兒島灣を北上する。前には巨人の如き櫻島が穩かな波の上に浮き出てゐる。此所を錦江灣と稱する程に景色は良い、が然し櫻島が餘りに近すぎる、初めての我々には櫻島山が餘りに大きく、餘りに高い、視界を壓せらるの感である。鹿兒島市民は朝夕此の巨人の如き櫻島に接して何をか感得しつゝあるであらう。

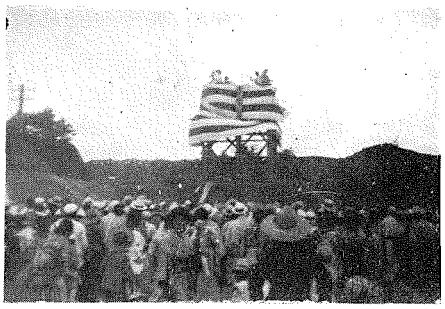
汽車が國分驛に着く近くに隼人塚と彫つた苔むした大石があつた。此邊から歷史的興味がそゝつて來る。國分は煙草の名產地として知られてゐる。其所から國都線が分岐して東に向ひ西都城に達するのであるが、目下工事中の處と、未着手の處とある。今日開通する霧島神宮驛は國分驛から東へ東へと上り勾配になつて汽車の進行ものろい。トンネルも長いのは一哩近くもあつて、建設工事としても樂な處ではない樣だ。

霧島神宮驛に汽車が着くと、煙火が上る、驛前に迎へた小學生が萬歲を唱へる、國旗を振る。數千の見物人が押寄せる、エライ騷ぎの中を驛前に出た。線路が高くて驛が低いからホームと驛の間は地下道で連絡されてゐる。此の設備は田舍には珍らしい。

驛前には鐵道省の受付があつて來賓に一々記念の菓子を渡される。大きな天幕張りの休憩所で茶菓の接待をうけてから炎天に出る。

直ぐ前に丸太造り紅白の幕張りの樽が出來てゐる。西松組で御祝の餅撒をするのださうだ。此の工區の工事責任者西松組は林米七氏が代表してゐる。林氏は九州に十五年間も蟠居して、鐵道建設工事に努力した人で、九州の事は何かと明るい。然も林氏が早くから南九州一帶の工事に着眼して、施工上の設備材料等に永久的の段取を立てゝゐるのは面白い

霧島神宮驛前の地方の少女の假裝



霧島神宮前の西松組の餅撒櫓

着眼である。

餘興の地方色

驛前の廣場は全然新開地で、小丘を切開いた道路の下に二三軒のバラツク建の飲食店が出來てゐるが、地方の群集に全く占められてゐる。炎天の下を右往左往する地方の見物人はやつぱり薩摩人である。鉢卷を締め袴の股立ちをとつて腰に木刀を差した草鞋履きの青年が多い。中には木製の薙刀を立てゝ列をなして歩いてくるのもある。或はメリンスの振袖を着て、鉢卷を締め、木刀を腰にした少女が、顏にマダラの白粉をつけて二人三人位づゝ隊をなして歩いてゐる。中には此種の武裝した老人が路傍で煙管煙草を吹してゐるものもある。而して此の炎天の下でも兒童は殆んど素足で大地を歩いてゐる。此の異樣な風俗の中に初めて幾分の鄕土氣分を發見してやつと安心した。

霧島神宮から溫泉

雜踏してゐる綠門の傍には自動車が十臺程あて神宮行の客を持つてゐた。今日を當て込んで鹿兒島邊から來て開業したものらしい。私は其一臺に乘り込んだ、幸ひ土地の人らしい三人の男女が同乘したので鹿兒島辨を充分に味ひながら霧島神宮へ登る事が出來た。驛から三十分間程で神宮前に着く自動車賃四十錢、而も歸路は三十錢に値下げをした。

霧島神宮社殿まで徒步十分間位を要するが、驟雨頻りにやつて來て涼風山に滿つるの有樣である。御かげで今までの苦熱もスツカリ忘れた。境內より遙かに鹿兒島灣と櫻島を眺める氣分は今回の行に於て先づ第一の爽快であつた。

老杉古松の間に官幣大社霧島神宮に參拜して參拜者名簿に署名した。神札を載いて境內を一巡する。常の事ながら、昔ながらの神社境內は何處となしに純な日本の尊いものを感ずるのである。華表前に出て十錢のウドンに腹を拵え、再び霧島神宮驛から汽車で西麓へ廻る事にした。午後二時頃驛前の雜踏を後に國分行の汽車に乘り、牧園驛に下車したのは三時すぎであつた。牧園驛から霧島溫泉まで登り四里の道路は實に良い道路である。危險な斷崖もなく、路面も良い、自動車賃七十錢である。溫泉行の旅客は少いと見えて、自動車もすゐてゐる。

溫泉榮之尾館

海拔二千五百尺の霧島溫泉は霧島嶽の中の高千穗峰の中腹に在る、私は榮之尾館に泊つたが、此外にも數軒の溫泉宿がある。現に眺望の良い山の角に新築中の宿も一軒あつた。宿は何れも二階又は三階で可成り大な建物である。私の泊つた榮之尾館はもと藩主島津家の別莊になつてゐたもので、建物も古雅な趣がある。

廣い室に一人ポツネンと坐つてゐると風の音と、溪流の音のみ聞える。山雨も頻繁に來往する。涼しさは骨に徹する程だ。浴客は八月が一番多いとの事である。全體から見ると自炊客の方が多いと云ふのであるから、此地方の人が經濟的な湯治場として利用されてゐるらしい。宿の人々も都會ズレのしない純朴な風だ。但し榮之尾館以外の事は私の知らない處である。

榮之尾館の浴槽は大きな內湯が三ヶ所あつて、透明なものもあり、白濁のものもあり、泉質も種々である。室內の湯槽も數ヶ所に在つて自由に轉浴する事が出來る。建物は少し古いが、入浴の氣分は關東地方の溫泉で味へないユツタリとした處がある。

私の隣室に霧島神宮から徒步で登つて來た新聞記者が泊り合せたが、入浴の所感は同樣で、ひどく氣に入つたらしい。

一日に云ふと、高度は伊香保より高くて涼しさも涼しい。景色は箱根以上で樓上から鹿兒島や櫻島を遙に望む。宿泊料も安い。九州へ次手があつたら一度は入浴すべきである。